

【福島育成園】

福島育成園は、生活介護(定員80名)と施設入所支援(定員40名)の障害者支援施設です。

近年、利用者の加齢に伴う身体機能の低下や老化の傾向が見られますので、医師や看護師、栄養士らと相談を密に行い、安全に過ごすことができるよう支援内容や食事内容の検討を行いました。また、介護保険が適応される年齢に達した利用者は介護認定を受けていただき、必要な利用者についてはご家族と相談しながら今後の生活の場などの検討を行いました。

生活介護では、個別支援計画をもとに、利用者個々の特性に配慮しながら、活動に参加することや安心して過ごせるよう担当者会議等で検討し支援を行いました。日中活動の作業においては、障がいの重い方でも取り組みやすく出来上がりが分かりやすい、ボルトナットの組み立て作業を港第二育成園と協力して取り組みました。また、毎週月曜日を納品とドライブの日とし、マイクロバスを使用しての外出の機会の提供を行い、東成育成園にはお菓子や飲み物の喫茶に行き、港第二育成園にはボルトナットの納品に行くことにより、利用者の気分転換になるようにしました。さらには自主製品の製造作業として、クッキー製造を毎週火曜日に行い、月1回地域で定期的に行われる、海老江地区のふれあいサロンで販売させて頂き、一緒に食事をするなどして地域の方との交流も重ねました。海老江地区での取り組みをきっかけに区内で行われている他のサロンでも購入依頼があり、福島育成園での取り組みの認知度が高まっています。

一方、施設入所支援では、安心安全に過ごすことができるよう、入浴、食事、排泄、着替えなどの日常生活が快適に過ごせるように支援をする一方で、栄養ケア計画を作成し健康管理に配慮した食事の提供を行うなど、個々に対応する支援をしました。そして、利用者の安全面の確保の観点より、入浴時や食事中に重大な事故が発生しないよう、緊急に対応ができるように浴室内と脱衣所、フロアに支援員の配置を徹底し、職員は救急救命講習の受講をしました。これらに加え、65歳に到達した利用者や、高齢化に伴う身体・認知機能の低下が見られる利用者に対し介護認定調査を導入して、今後の生活のあり方等を家族の方と話し合いをしました。また、外出する機会を多く提供できるよう、舞洲障がい者スポーツセンターのグループ教室に参加し外出の機会とともに、定期的に身体を動かす機会を設けました。

【ビーンズ】

ビーンズでは利用者15名に対し、福島区内の3住居でグループホームの事業を行っています。

利用者本人が安心して心豊かにすごせるように、生活支援員・世話人を始め、区障がい者相談支援センターとの連携も図りながら、個々の利用者に応じた支援を行いました。そして、高齢となった利用者に対してはグループホーム内の段差の解消、階段の滑り止めや手すりの設置等、安全に生活が送れるよう住環境を整えました。

2019年度(平成30年度・令和元年度) 決算について

本紙6ページに掲載の資金収支計算書を用いて決算状況について解説します。

2019年度(平成31年度・令和元年度)では、法人全体として「事業活動による収支」の「収入の部」の合計である「事業活動収入計(1)」は、約9億2,926万円となり、「支出の部」の合計である「事業活動支出計(2)」は約8億9,782万円となり、収入と支出の差を表している「事業活動資金収支差額(3)」では、約3,144万円となりました。次に「施設整備等による収支」では、「施設整備等補助金収入」では、港育成園の北面ブロック塀の置き換えにかかる大阪市補助金を50万円いただき、置き換えとしてフェンスにした工事を含めて「固定資産取得支出」として約940万円を計上しています。その結果、「施設整備等資金収支差額(6)」では約885万円の支出超過となりました。

また、「その他の活動による収支」の「積立資産支出」では約2,467万円を支出しています。このうち、約2,057万円は当年度の社会福祉事業で生じた資金収支差額であり、例年どおり将来の修繕・設備更新用として積み立てました。その結果、「その他の活動資金収支差額(9)」では約2,166万円の支出超過となりました。

最終的に「当期資金収支差額合計(11)」は約92万円を計上することができました。

一方、社会的にも課題となっている福祉人材不足の影響も少なからず受けており、当法人でも継続した職員採用を検討しています。

今後は人材の確保をしながら健全な法人運営を目指すとともに、安定的な経営が出来るよう、さらなる努力をしていきます。